人生の贈りもの

思想と空間結ぶ学問 つくりたい

京大人文科学研究所所長　山室信一（63）　7

中国・南京で。1989年の天安門事件直後に半年間、中国における日本文化の教育拠点「北京日本学研究センター」で教えて以来、中国との往復が続く＝本人提供

――東大助手などを経て1986年、京大人文科学研究所の助教授になります。

人文研は中国文化を研究する目的で戦前に設立された組織を前身に持つので、中国の文献が国内で最も豊富にそろっています。それが魅力でした。

普通の大学だと教授がいて、その下に准教授がいて、さらにその下に講師がいてという関係がありますよね。でも人文研は研究者一人ひとりがまったく違う分野を持っていて、独立しています。歴史、言語、思想芸術などなど。昔から「権威を作らない」をしきたりにしているので、飲みに行くと学内の業務で忙しくしている私も「ちゃんと論文を書かないとダメですよ」と、若い研究者から叱咤激励されることもあります。

――「象牙の塔」とは正反対ですね。

そんな自由に発言する研究者たちが集まってそれぞれの専門分野をいかした共同研究が人文研の特徴です。戦後に所長を務めたフランス文学者の桑原武夫さん以来の伝統です。

――個性の強い研究者が集まる共同研究は、どんなふうに進むのでしょうか。

ふだんは月2回集まって研究発表します。午後2時からだいたい午後6時まで。でも本番はそこから。大学近くの飲み屋に移って午後10時くらいまで本音を言い合うわけです。最初は私も戸惑いました。自分の発表した研究について研究会では批判も指摘もされず「乗り切った」と思っていたら、飲み会でコテンパンにたたかれるんです。

――そこで鍛えられたわけですね。

昔は午前0時過ぎまで続くのが普通でした。先生たちは祇園にそれぞれ通いの店を持っておられて連れて行ってくれました。研究の話をしているとほかのお客さんが加わってくることもありました。当時の先生方の支払いはたいへんだったはずです。いまはとてもそんなご時世ではありませんが。

――人文研でご自身の研究の代名詞となる「法政思想連鎖史」という学問分野をつくりました。どんな学問ですか。

明治期に欧米から入ってきた思想は日本国内にとどまらず、その後に中国などのアジアの国々に普及していきました。なぜそう言えるかというと、中国やベトナムの文献に「独立」「自由」などの言葉や日本の文献と似た表現が出てくるんです。明治の日本人が試みた西洋言語の翻訳語がそのまま海を渡っていたのです。アジア各地から日本に来た留学生や日本から赴いた教師が媒介していたんですね。日本が思想の結節環になっていたというわけです。思想は人をつなぐ、ですね。

それでその思想の連鎖を追究する学問を、なじみにくい言葉だと思いますが「法政思想連鎖史」と名づけました。こんなふうに思想の広がりを空間でとらえる学問をすすめて、さらに「思想空間学」としてまとめることが、これからの研究人生の課題と考えています。

（聞き手・河野通高）